

第九章 匪賊及び住民

才一節 昭和十四年頃の匪勢概況

昭和六年（一九三一年）滿洲事變の勃発によつて治安が亂れたのと、旧東北軍が解体したことによつて職から離れた兵士らが治安の亂に乗じて匪賊化したため、一時滿洲の匪賊数は膨大なものとなつたがその後逐次治安の回復と共に匪賊稼業を止めて正業に就いた者や關東軍の行つた連続不斷の討伐のため、匪賊の数は極端に減少した。しかし匪賊数の減少に伴ひそれに比例して滿洲の治安がよくなつたとは言はれない。

昭和十四年（一九三九年）の前半頃まで、残つて居た匪賊は滿洲全部で僅か三千名内外であつたが、その個人々々について観るならば志操堅固な者ばかりであつて、數こそ減つたけれど一騎当千の猛者であり匪賊の勢力は昭和十四年の前半が絶頂であつたと言ひ得る。

才一款 匪族と環境

其の一 匪賊の種類

匪賊をその性格の上から分類して見ると、土匪と思想匪に、思想匪は更に共産匪と抗日匪に区分できる。

(一) 土匪

土匪は全滿洲に分散して居るが思想匪と異なり寧ろ中、南滿の発達した地域を根城にするものが多い。そして彼らは豪農や豪商を強迫、または襲撃して金、銀、財、宝を掠奪することが目的であるから、多少治安を乱ることにほなるが、かかる徒輩が居つたとして警備上、齒牙にかける程のことではなく、所謂、強盗團乃至ボスと称するものであつて警察の所管に属するものである。その上土匪は思想匪から白眼視せられ、蔑視されて居るから一物奪り強盗を嘲つて居た一土匪が彼ら仲間を幅をきかすことはない。従つて土匪に関する記述は省略することにする。

(二) 思想匪

思想匪にはソ聯邦の一環として世界赤化の一翼を担はんとする共産匪と、日本の対支戦争遂行をその背後から攪乱して戦力を滅殺し、関東軍の行動を制肘しやうとする抗日匪との二者があつて、兩者共に真に扼介な存在であつた。

彼らは共に暴団して行動し、日滿両國に協力する者を強迫したり日、滿の各種の施設などを襲撃して居た。然しながら彼らは決して一般住民を苦しめない。否を寧ろ住民を壓迫する一部不良な滿洲國官憲を襲うて住民の味方であることを示し、稀に日本軍部隊をも攻撃（待伏攻撃）して彼らの戦力が強大なことを誇示して、住民が彼らを尊敬し、彼らに協力するやうに仕向けて居た。

従つて彼らは自らの行動を愛國運動と誇稱し、附近住民も亦さやうに信じて居た。私々が普通匪賊と呼んで居るのはこの思想匪のことである。これが滿洲の治安を亂して居た最大のものである。しかしいか
三
に思想匪であつても武器や弾薬の補給がなく全くの独力で長期間に亘

つて日満軍に抵抗を指統することはできない。必ずや外部から援助が
あり蔭で彼等を操縦する者があつた訳で、その蔭に居つたものこそソ
聯邦であり、重慶政権であつた。

其の二 匪賊と外部との関係

(一) ソ聯と匪賊

昭和六年の満洲事変以来、満洲に於けるソ聯邦の勢力は衰退の一途を
辿つて居たがソ聯国内の肅正が略く一段落を告げると、ソ聯の極東に
対する関心は増大し、倏次に亘る國境紛争事件（アムール河のカンチ
ヤズ事件、張鼓峯事件及びノモンハン事件の外飛行機及地上の小部隊
による越境事件など）が頻発し、遂次満ソ兩國の関係は極度に緊張し
て来た。

これに呼応するかのやうに、満洲国内の匪賊の活動も、にはかに活潑
となり、ソ聯に於て教育訓練された共產分子が、密かに越境して（主
として大黒河以東及以南から）満洲國に入つて活動を始めた。

42
-14
20
29
128
57A

0234

その中には逃亡を偽装して入国した者もある。
彼らは浙江省と三江省の省境附近の山地、及間島省、吉林省、通化省
内に蟄居した。前者は北滿省委及び東北抗日第二路軍を編成して、絶
えずソ聯と連絡しつゝ、北滿洲に散在する匪賊に指令し匪賊の行動を統
一した。

南滿洲には間島、吉林、通化の三省を根拠地とした、南滿省委や東北
抗日第一路軍があり、重慶政権に操縦せられる匪賊と合同して南滿の
治安擾乱を開始した。

ソ聯に糸をひく匪賊には鮮人を匪首とするものが多くその尤なるもの
を金日成（当時二十九才）とし朴得範、崔賢、金光などの幹部が居る。
これら匪首の年齢を一瞥すると、どれもこれも三十才以下の若者であ
ることは特に注意する必要がある。

就中金日成（写真才一参照）は在滿朝鮮人間に多大の人氣があり、彼
を目して朝鮮の英雄と賞讃し、物心両面から密かに援助する者が多い

五

0453

との噂が多かつた。

六

金日成がソ聯邦と密接な關係ありと断定した理由は彼が關東軍の討伐に會ひ、滿洲内に潛むことができなくなると必ず暉春北方地区からソ領に逃走し討伐部隊が引き揚げると再び入滿した歴然たる証拠があつたからである。

(二) 重慶政權と匪賊

在滿匪賊が重慶政權と如何なる關係にあつたかに就ては金日成とソ聯のやうな確たる証拠はない。(支那事変によつて中共が重慶と合体したため、重慶政權の中には当然中國共產黨を含むものと承知せられたい。)

たゞ彼ら匪賊が自ら中國共產黨と稱へ、中國政府の指令をうけて行動すると宣言し、失地の回復と反滿抗日を標榜して居たなどの点から彼らと重慶政權とは密接不離の關係にあつたものと推測するのである。しかし彼らは金日成が聯から武器や弾藥の供給を受けて居たやうなこ

とはなく、更にいかに苦しくなつても満洲から逃れる術もない。たゞ単に精神的の連繫があつたと想像する訳である。

これら匪賊の頭目を列举すると揚瑞宇、陳翰章、曹亞範、金光などで金光を除く外は漢人であることも、ソ聯に操縦せられる匪首が朝鮮人であつたのと違ふ所であり、また、これらの匪首が全部殺害せられるか進退窮つて投降したことも前者と違ふ点であらう。

以上のやりにソ聯關係の匪賊と重慶關係の匪賊とに区分したものの、實際問題になるとこの両者は反滿抗日、關東軍を滿洲内に拘束する、而も關東軍の対ソ作戰の準備を妨害する点に於てソ聯も重慶も完全に一致して居たから自然彼ら匪賊も全く一体となつて治安攪亂をやつて居たやうである。

其の三 匪賊蟄居の条件

滿洲に於ける匪族の根拠地を眺めると、彼らは生存に便利なこと、日清軍官憲の討伐が困難なこと、重要施設を脅威するのに都合がよいこと

七

となどを考へて居たやうである。

生存に便利なことは物資が豊富であり、かつその入手が容易であることである。そのためには平地と山地との接点附近であり、かつ住民が匪賊に好意を寄せる所であらねばならぬ。

日満軍、官憲の討伐を困難にするためには鉄道や道路から相当離れた山地が適当であり、彼らの行動を容易にするためには、身の安全ばかり考へて居れない。

以上の観点から、彼らの蟄居地を観察することにする。

(一) 蟄居地域

全滿洲に亘つて匪賊の蟄居して居た地域を挙げると、北滿では三江省の南部、勃利の西方牡丹江流域から老嶺山脈内一帯を根拠とする北滿省委と東北抗日第二路軍（總司令は不明）、北安省海倫東南方の山地帯、北安西北五大山附近の地域、東安省の完達山嶺一帯及浜江省の東部地区であつてそこを根據地に遊動する匪賊が主なもので、中、南滿で

は間島省、通化省と吉林省東半部の山岳地帯に蟠踞する南滿省委と東北抗日第一路軍（総司令楊靖宇）、牡丹江省の南部を遊動する陳翰章匪が主なものであつて昭和十四年初頃の調査によると、総数は凡そ三千と称せられて居た。

この外熱河省の西南方に於て治安を亂す匪賊が居たがこれは實の所匪賊と称すべきものでなく、中共の八路軍が關東軍の背後を攪亂するたぬ熱河省内に侵入したものであるから、北滿や中、南滿の匪賊とは全く性格が違ふものである。

(二) 匪賊と住民

無住地帯では匪賊の蟠踞地域にならない。たとへ匪賊は無住の山地に住んで居ても、附近には必ず民家がある。

住民なしでは匪賊は生存できない。附近の住民に庇護せられ、援助せられて、始めて生存できるのであつて、住民と匪賊とは密接不離な關係がある。

匪賊が定住して居る所、その附近の住民は必ず匪化されて居ると想つてよい。匪賊の一味と目して差し支へない。

特に人種と匪賊との關係については十分、承知して居る必要がある。閩島省は朝鮮人の多い省であり、省民の八割は朝鮮人である。

由来、滿洲や沿海州に居る朝鮮人は不良、不逞、抗日の者が多かつた。彼らが滿洲に移住した原因を調査して見ると、李朝の悪政に疲労困憊し、安住の地を滿洲に求めやうとした者や、日本が朝鮮を併合したことを不満として滿洲に遁れた者や、朝鮮で悪事を働いたため、郷土に居ることができず逃れて来た者などの子か、孫か、それともその本人かであるとのことである。

従つて日本に対しても滿洲國に対してもよい感情を抱いて居ない。その上彼らは滿洲國ができ、滿洲に対する日本の勢力が確立すると張作霖時代以来漢人に壓迫されて居たのが、やつと解放せられた気持ちになつて威張り出した。殊に閩島省ではその傾向が強かつた。そこで滿洲

国が国軍や警察隊を派遣して鮮匪である金日成や朴得範や崔賢を討伐させやうとすると、住民（朝鮮人）は匪情について何一つ提供しない。露営や炊事の用具も貸さうとしない。反つて満洲国軍警の掠奪や用の無断使用などを列挙して関東軍に許へる有様である。

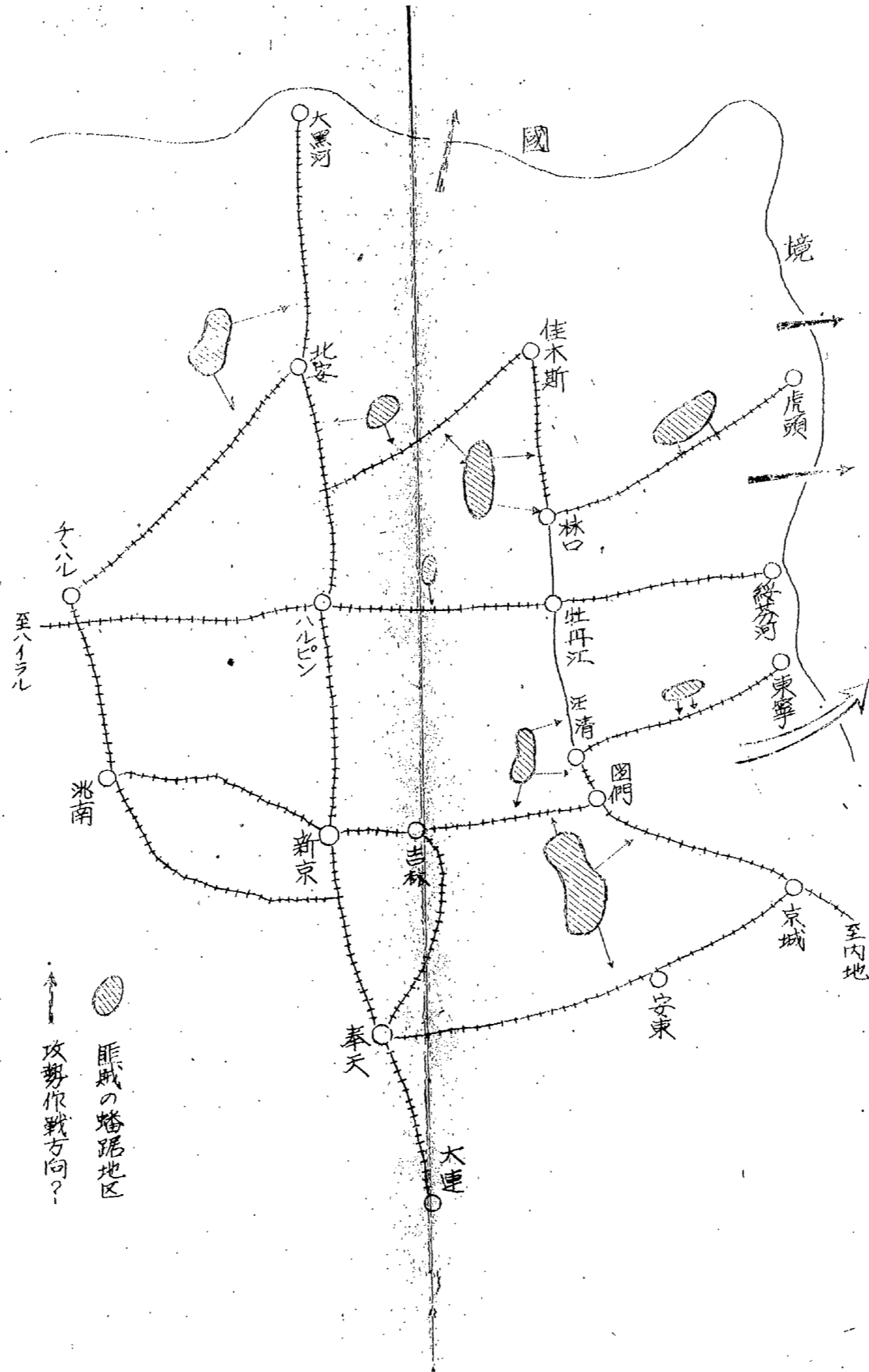
かやうな状態だから鮮匪は多く閩島省内を根城にして活動した。生活のためにも、安全のためにも、遊動するためにも常に住民を味方にすることができたからである。

爾来我々も鮮匪を討伐するためには、朝鮮人で特別に編成した部隊を指し向けることにした。

このため、所在の朝鮮人は漢人で編成した部隊に対するやうな「我不関」の態度はとらなくなつた。寧ろ同胞の軍隊ができたことを喜び合つて大歓迎した。然しながら進んで鮮匪の討伐に協力することはしなかつた。たゞ漢匪の討伐には積極的に協力するやうになつた。

(三) 作戦と暗躍地

匪賊の蟠踞地域を戦略、戰術的に觀察すると、興味深いものがあると思ふ。対ソ攻勢作戰を企図する関東軍、特に主決戰場を東部地区と予定して居る関東軍にとつて見れば、匪賊が図のやうに蟠踞して居ることとは正に重大な脅威である。日ソ間に戦争が始まつた場合、匪賊のため勤員輸送が妨害される。途中輸送が遲滞する。兵力の移動や、兵員及軍需品の補給が妨げられる。関東軍に関する情報が手に探るやうにソ聯に通報せられる。理由は挿図一を見れば一目瞭然であらう。ソ聯と匪賊と一脈相通するものがある現況に於ていざ作戰といふ場合のことを思ふと心配でならなかつた。ソ聯の謀略部隊を輸送幹線の側面に放置するのと同じだからである。



挿図第一
 匪賊の蟄居地区と関東軍の予想作戦方向との関係要圖

0461 0243

才二款 思想匪の生活

其の一 山 寨

匪賊は平時よく遮蔽され、水や食糧の運搬、取得に便利な地点を選んで写真（写真才二参照）のやうな山寨を作つて生活して居る。

山寨は討伐隊に見せられると、焼却されるから所々方々に数多く予備の山寨を準備して居る。特に冬期は凍結のため新に山寨を構築することは至難だから、冬期間、不自由しないやう遅くも十月中に所要数だけ作つてしまふ。

たゞ暖い期間は簡単な天幕を張つて露営するやうである。特に討伐部隊に追はれて居るやうなときは冬期でも天幕で辛抱して居る。

匪賊の中には女隊員（写真才三参照）も居る。被服の修理は女隊員の仕事であつて、大世帯の匪団は三台もミシンを持つて居たことがある。女隊員であつても戦闘員であり、銃銃の操作位は十分心得て居るから決して油断することはできない。

昭和十四年夏から昭和十六年三月まで、連続して実施した三省（間島、吉林、通化の三省を指す）連合の討伐（写真才四參模）では、焼却した山寨が凡そ千五百に達した。

其の二 衣 食

(一) 衣

匪賊の衣は一般の住民に比べると相当立派である。匪賊は時々連絡者を最寄の都会に派遣する。その目的は都会に潜む同志と会合して、一般の社会情勢や、滿洲國の政治に対する住民の態度や、關東軍や滿洲國軍、警察の動き、特に對匪行動開始氣配の有無などについて探知する。その連絡地点は奉天、吉林、ハルビン、海倫などのやうである。従来奉天や吉林省内で匪賊を捕へた例も二、三に留らない。また、これらの都市には、私かに匪賊に共鳴する者があるらしく精神的ばかりでなく、金品を以て匪賊を支援して居る者の居ることは、確たる証拠を示し得ないが当然予想し得られる所である。

かやうな目的を以て連絡者が、都会に出かけたとき、彼らの日用品と一緒に被服やその材料を買ひ込んで来る。勿論、多量の品物を一時に彼らの蟠踞地区に運んで官憲から怪まれるやうなことはしない。その外の入手方法としては満洲國警察を襲撃して、兵器や弾薬と共に警官服、外套などを掠奪するので、それを改造し、着用して居るもの、關東軍や満洲國軍の被服を入手して着用するものなど種々雑多であつて、同一匪団であつても服装はまち／＼であるが、不足はして居ないやうである。防寒服も一通り揃へて居る。

(二) 食

匪賊の食物は鮮匪は朝鮮人と、滿匪は漢人と全く同じであるが行動中は粉製品を食べることが多い。

彼らは、自活のためであつても農耕は殆んどやらない。然しケシの栽培だけは別のやうで、彼らの蟠踞地区上空を飛行すると、所々にケシの花を認めることがある。彼らはケシを収獲し阿片を密売して暴利を

貧りそれに依つて衣、食購買の代金を充て、居る。

一六

その他附近住民の獻納品に依存したり匪団に協力しないで官憲に組した部落から根こそぎ掠奪したものなどがある。だが討匪部隊に追撃されて居る間の食糧には随分困るものらしい。かやうな場合に備へるため、彼らは行動地域の住民と極力親密にしておき、必要に依り容易に住民から購買できるやうに平素から必要な工作を実施して匪賊に好意を寄せるやうにして居る。

其三 匪賊と住民

匪賊と住民の関係についてはすでにその一部を述べておいたが、昔から「住民あつての匪賊であり住民から見離されて匪賊は存在できず」と言はれて居るが、正にその通りであつて、匪賊の蟠踞する所には必ず匪化された住民が居り、匪化された多くの住民が住む地域には必ず強大な勢力を持った匪賊が横行すると思つて間違ひない。衣食の項で述べた通り匪賊は衣、食、住の大部を附近の住民に依存す

るばかりでなく色々な情報、殊に軍官憲の討伐行動を適時に報告して呉れるものも亦住民である。

かやうに住民が進んで匪賊に協力するやうにするために、匪賊も住民に対し種々の便宜を与へたり、保護したりして居る。即ち持ちつ持たれつの原則によつて共存を期して居る訳である。

匪賊が住民に与えて居る便宜や保護の手段を列記すると次のやうである。

一 官憲の不法に対し住民を保護するのは勿論時として住民のため進んで官憲を襲うて解散する。滿洲國の警察で襲撃されたものも数多い

二 土匪に対し住民を保護する。若しその勢力範囲内の住民を襲撃する土匪があるときは必ずその土匪に報復する。

三 匪賊に好意を示すか、将来自分の勢力下に入れやうとする住民を襲撃しないばかりか反つて農禁期などには播種や収穫を援助することさへある。

四税金を政府に納税させず住民の負担を軽くして恩を着せる。従つて
住民は税金の中から相当量を匪賊に獻納する。滿洲國、官憲は討伐
部隊として集團行動するときには浴別小隊では匪賊に威壓されてこの
事實を知つて居ても放任するしかない有様である。匪化地帯では殆
んど全部が同様である。

この外、同民族の關係から匪賊と住民が特に親しかつたり異民族なる
が故に、同じ側に立つべき官憲と住民とが反目したりすることがある
のは、すでに間島省の匪賊と住民との關係で説明した通りである。
この傾向は漢人よりも朝鮮人に強いやうである。即ち民族意識は朝鮮
人が強烈である。

以上のやうな有様だから匪賊を無くすためには先づ匪化された住民の
絶無を期さねばならない。住民が心から匪賊を憎み匪賊の存在を否定
し、匪賊に敵対する考を持つやうにならねばならない。

かくて始めて匪賊は絶滅し得る訳であつて、かやうにすることを匪民

分離と言ひ、才三節に於て詳しく述べることにする。

才三款 思想匪の編成、装備、戦法

其の一 指揮系統

滿洲に蟄居し、治安攪亂に任じて居つた思想匪は大別して二つである。即ち東辺道（通化、間島及吉林省の東部）の山地を根拠地にした東北抗日才一路軍（總司令楊靖宇）と三江省の西南部、滨江省の東部、北安省の東部山岳地帯を根拠とする東北抗日才二路軍（總司令不明）である。才二路軍總司令は昭和十四年初め關東軍に帰順したので同軍の勢力は屯に減少した。

路軍の下に方面軍、方面軍の下に旅がある。

路軍や方面軍や、旅の人員数は全く不定であるが、昭和十三、四年頃匪賊の勢力最も猖獗を極めた時でさへ、全滿洲の匪数は三千乃至四千しかなく、それを二路軍、六方面軍に区分して居るし、實際に討伐などで遭遇した匪団の人数から想像して方面軍の兵力は三百名を出ない

やうに想ふ。

才一、才二路軍閥の相互關係や、ソ聯や中共と匪団との關係は必ずしも總司令が一括して指令をうけるものとは限らない。彼らは自分の行動を便利にするためと安全を図るため一指揮系統内に、はいつて居るに過ぎずソ軍や中共との關係の厚薄は全く別のやうである。それが証拠に東北抗日才一路軍才二方面軍司令官金日成とソ聯との關係を見れば判ると思ふ。

其の二 裝備

匪賊は輕裝備である。兵器は小銃、劍銃、自動小銃、輕機関銃、重機関銃（極く少数）擲弾筒などで砲と名付ける程度のもは、一切所持しないやうであつた。

兵器は種々雑多で日本製のものや滿洲國官憲のものや、旧東北軍が使用して居たものが大部分であつて、ソ聯製は殆んど見当らなかつた。これらは日本軍や滿洲國軍を待伏攻撃して鹵獲したものや滿洲國警察

を襲撃して掠奪したものや満洲事変後の敗残兵から購買したものなどで、新旧混淆し、性能もその差はひどいものである。たとえ幹部が持つて居た剣銃は相当新式のものがあり、高価なものゝやうである。

兵器に比べ装備、弾薬は実に少ないやうで小銃で二〇発、機関銃で百発、擲弾筒に至つては五発もあればよい方である。従つて匪賊が弾薬を節約する精神は非常に強く、一発でも決して無駄にせず、慎重なのに感心した。これは弾薬を補給するには日満軍と戦闘して勝利を得る危険を冒さねばならなかつたからである。實際は満警を襲撃して、分捕ることが多かつた。

通信は専ら無線電信に依存し、匪団間を連絡して居たやうで、携帯用の五号、六号機を装備して居た。その他狼火を峯から峯にあげて遠距離の通信連絡手段にして居た。

また匪団の蟄居地帯は軍、官、憲の討伐行動の不便な山岳が多い關係上、彼らの行動は全く徒歩である。従つて人員、兵器、食糧など運搬

する自動車は勿論、牛馬車すら持たず、精く牛の背を借りて食糧を運ぶ位なものである。(間島省、吉林省、牡丹江省、通化省附近は牛が多い) 木橋道以外に道路らしい道路もない倒木の多い密林を猿のやうに行動し、討伐部隊に追はれ、逃げ迷う彼らは、頭から足先まで怪髪を方一にして居る。ただ将来の匪賊は分解して選ぶことのできる追撃砲や山砲程度のものは持つやうになるかも知れない。併し彼らの行動地域が平地方面にまで拡張されない限り、砲兵を持ち、自動車や乗用車を装備することはないであらう。滿洲に於て自動車が自由に走れる地域は極めて少ないし、山地の殆んど大部は全く自動車と縁のない密林であり、匪賊は國內全般の治安が乱れて居るときならいざ知らず大抵はかやうな山地に蟠踞するものであるからである。

其三 戦法

(一) 編成

匪賊の戦法は正々堂々の戦陣を張つて離離を争ふ戦闘でなく、術策を

算し、相手の虚に乘し奇襲することをして常用戦法とする。従つて匪賊は五十名以下、大抵は三十名以下の小人数毎に一団となつて生活し、活動して居る。大人数で行動することは彼ら自体の生活が困難なばかりでなく、日満軍警から、捕捉されやすいから、自然さやうになるであらう。若し五十名以上の匪団が居たとすればそれは二匪団以上が一時合流したものと想像してよい。

(二) 慣用戦法

匪賊の慣用戦法は待伏と襲撃と破壊である。

待伏は彼らが、日満軍警に対し、採用した唯だ一つの積極的戦法であつて、彼らの勢力が最も強かつた昭和十四年頃は満洲国軍に対してのみならず、関東軍部隊に対しても屢々採用した戦法である。

襲撃とは匪賊が孤立した満洲国の県公署や警察署を夜襲し、兵器、弾薬、被服などを掠奪する方法で、特別、匪賊からにらまれて居ない限り人命を害うことはない。たゞ獲物が少ない場合、人質として要人を

拉致することがある。昭和十三年頃までは匪賊の襲撃をうけた場合、二四多くの警察は何ら為す所なく、手をあけて匪賊の掠奪に委せて居るのが普通だつた。

破壊とは鉄道、通信、設備などを破壊して交通、通信を妨害し、一般人に不安の念を起させるのが目的であるが、これらの設備を破壊しても大した効果がないのに反し、匪賊の能力から大破壊はできず、すぐ回復してしまふ。日満官憲は民心に及ぼす影響を考へるから、その行為を憎むこと甚だしく徹底的に匪影を探し求めて掃滅しやと努める。しかも匪賊は自分の所在を日満官憲に通知したも同様であるから捕捉され易い。

従つて交通、通信施設を破壊して民心を不安に陥れたり官憲に与へた損害よりも匪賊が受ける損害の方が多いのを通常とする。だから新米の匪賊か、自暴自棄になつて居る匪団なら格別、普通の匪賊は鉄道や通信施設なんかを破壊しやうとはしないやうである。彼ら匪団の横行

が最も激しいと称された昭和十三年から十四年の間に於ても匪賊の鉄道運行妨害（犬釘除去と大石を線路上に放置）は京函線（新京一函們）に於て二回あつたのみと記憶する。

(2) 待伏

待伏は彼ら得意の戦法であり、昭和十三年の後半から昭和十四年の前半に亘つて屢々これを用ひて戦果をあげて居た。満洲国軍、警が数多くやられたのは勿論、関東軍所屬の部隊、而も匪賊を討伐して治安維持の直接責任者である独立守備隊の中隊が、待伏攻撃をうけて全滅したとさへ一切ならずであつた。

彼らが待伏する地点は自動車の運行を許す、山岳内の主要な道路上であつて、自動車輸送の軍隊、警察又は軍需品がその目標である。待伏攻撃に最適の地形とは次のやうな地点であらう。昭和十四年春、間島省安図の北方で匪賊が行つた地形は挿図オ二のやうであつた。

0257

二六

0475

匪賊待伏実施の一例

挿図第二



- 一 明月溝—安岡道 路巾五米
- 二 兩側の木田は徒歩兵の行動を許すも、六月末にて苗を植えて居た。
- 三 道路路側の高地は比高三・四〇米の丘阜で疎材あり。
- 四 独立守備歩兵一中隊は昨夕安岡方面に匪徒を得て、今朝急ぎ明月溝から自動貨車に今來安岡に急行。
- 五 昭和十四年六月末の十四時頃。
- 六 中隊長は先頭車に乗車、自動車の間隔は五〇米と規定せらるも途中乱れて二〇—三〇米位に縮つていた。
- 七 運行中前後左右に對する警戒は十分とは認めがたい。

日本軍中隊長以下全滅

0476

0258

右の突例について教訓を求めるならば次の通りである。

(イ) 討伐隊の行動を秘匿すること。

安図方面の匪情を得た明月嶺駐屯の中隊は隠密而も迅速に討伐準備を行ひ、早朝住民の目につかない中に出発すべきであつたと思ふ。日本軍の周囲には常に匪賊一味の目が光つて居り、適時日本軍の行動が匪側に報告されるものと思はねばならない。

(ロ) 自動車行軍に於ける各軍の距離は少くも一〇〇米以上にすること。自動車間の距離が少いため、先頭車から後尾車まで彼らの網の中に完全に突入してしまつた。若し一輛でも二輛でも網の外に居つたなら全滅を免れるばかりでなく、反て攻勢に出て匪賊を撃滅することもできたであらう。匪化地帯であり、通視が十分できない地域を自動車行軍する場合はできるだけ、各軍の距離を大きくすることが肝心である。

(ハ) 前後右左に対する警戒を厳にすること。

匪賊地帯を通過するときには前後左右に対する警戒を怠つてはならない。二八

従来の経験によると、監視警戒に任ずるのは兵であつて、中隊長やその他の將校は多く乘な助手台に乗つて居るやうである。そんなことでは恐らく警戒の目的は達せられない。宜しく將校自らが車上に立ち、同乗の兵を指揮して、警戒に任ずるやうであらねばならない。殊に夜行軍を実施する場合は、夜明どきに注意する必要がある。警戒兵の多くは車上で居眠りして警戒などは恐らく名ばかりであることを知るだらう。

(二)不意に四圍から射撃をうけた場合、諺しも狼狽する。そして多くの者は何ら為す所なく右往左往し、ついに全滅せられるのである。この場合若し一団となつて、どこでも構はず一ヶ所を打ち破つて網の外に出ることができたらどうだらう。行動の自由さへ回復すればよい方法も考へ浮ぶことが出来る。このためにも將校や上級

下士官が各車に分乗して居ることが必要になり、行軍途中万一の事件が起きたらかくするとして予め教育し、注意を喚起しておくことが必要であらう。

敗残の跡をみると車は各車毎に右往左往したらしく、或る者は水田の中に転覆し或るものは道路を塞いだまゝで燃え、四車の間に何らの統制の跡も交戦の跡も見られなかつたのは実に残念であつた。

(2) 襲撃

こゝで言う襲撃とは匪賊が滿洲國の官署を夜襲することである。昭和十二、三年頃の滿洲國警察官の素質や教育は十分でなかつた。

いな撃つ、相当精練された者は新京とか奉天とか、ハルビンとかの大都会に集中せられ、田舎、山間の警官は実にひどいものであり、甚しいのになると警官自らが住民を壓迫し、間接に治安を乱して居る者もないではない。

匪賊がこれら洞洲國警察や県公署を襲撃する目的は武器、弾薬、被服
 を補給するためであつて、これら諸官署の官吏は一たび匪賊の夜襲を
 うけると殆んど抵抗することなく、匪賊が要求する品々を彼らに与へ
 て恪たるものであつた。従つて匪賊の弾薬も兵器も、被服も全部、洞
 洲國が補給して居るやうなものである。匪賊の警察署襲撃は到る所で
 行はれ大抵の場合、警察側の負であつたが、昭和十四年の末から十五
 年にかけては匪賊討伐の進展につれて警察官の士氣も昂揚せられたた
 め、襲撃をうけるや直ぐに手をあひる者が少くなり、飽くまで抵抗し
 つゝ、救護隊の到着を待つ者も多くなつて来た。従つて昭和十四年以來
 討伐軍隊によつて追ひ廻はされて居た匪賊は、更に警察官の抵抗をも
 覚悟せねばならなくなり、補給源を絶たれた有様で益々困窮して来た。
 従来警察官の中にも匪賊に内応する者があつて匪賊を手引きして夜襲
 を成功させて居たものである。かゝる不心得の者は遂次少なくなつた
 けれど昭和十三、四年までは洞洲國官吏たらんか、それとも匪賊たら

んかと迷ふ警察官も居たのである。
 彼らが警察署や県公署を襲撃する目的が目的であるから、附近住民には全く危害を与へないし、庄氏は予め襲撃の日時を知つて居るやうであるが警察に決して密告することがない。こゝにも匪民の合作、政治の不滲透が察せられる。

才二節 匪賊討伐

才一款 軍隊、警察による討伐

其の一 討伐期間

(一) 長 短

匪賊を掃滅して治安を回復するため、軍警を以て討伐を実施する期間
 はできるだけ長期なことが絶対条件である。軍警の大部隊を以て一
 気呵成に行動して匪賊を掃滅することは、過去の経験上殆んど不可能
 であつて、かゝる方法による討伐は百害あつて一利なしと断言し得る。

なぜかならば匪賊は討伐部隊が優勢のときは、極力交戦を避けて密林^{三三}地帯に分散退避するか、匪化された住民に庇護されて良民を襲ひつゝ、農耕に従事し、討伐部隊の引揚を待つて再び活動を開始するからである。

また住民も討伐部隊が討匪行動を実施して居る間は表面的にそれに協力するやうに振舞うけれど、心から討匪に協力するのではない。若し心から討伐に協力した場合、尚もなく軍警が討伐を終つて引揚げたとなると次は匪賊からにらまれて従米のやうに庇護をうけ得ないばかりでなく、反つて壓迫をうける虞れがあるからである。

従つて住民と匪賊との相互援助の關係を断ち切るため、即ち住民が安心して討伐軍、警に協力できるために討伐期間は長ければ長い程よい訳である。

昭和十四年八月三省（吉林、通化、閩島の各省）聯合討伐を關東軍の獨立守備隊六ヶ大隊と滿洲國軍及同警察凡そ二万人を以て三ヶ月の予

定で開始しが、皆目匪情も判らず、殆んど何らの効果もあげ得なかつた。

そこで予定を変更し、更に三ヶ月延長して引き続き討伐を続行したけれどもやはり成果は思はしくない。こんど経費節約の見地から討伐兵力を減少すると共にまた昭和十五年三月まで継続することとし特に冬期間も討匪を実施したが、結果はあがらなかつた。その原因をあげるとすれば

1. 住民の協力が得られなかつたと一理由は前述の通り
2. 匪賊は間もなく討伐部隊は引揚げるだらうから、もう暫くの辛抱と称して結束を固めて居たこと。

3. 討伐部隊自身も亦従来の討伐期間が、左程長くなかつたことを経験して居たから、今度の討伐も近く終了することを期待して居たこと

などのやうである。

そこで関東軍は匪団を掃蕩するまで、討伐を続行することとし、匪賊と根氣比べをする覚悟で、その後は期限を定めず、目的を貫徹するまで続けることに決定した。

討伐開始から丸一年を経過した昭和十五年九月頃から僅かづつではあるが、匪情も判り、戦果を収めるやうになつたが、まだ予期したやうな成果は納め得なかつた。然し同年の冬期になると匪団の結束も崩れだし、匪情もどん／＼入手できるとなり昭和十六年三月末まで、前後一年八ヶ月連続不斷的討伐によつて金日成匪を除く他の総ての匪団を潰滅し、匪首を射殺するか、帰順させて三省内に匪影を認めないやうになつて、討伐を終了した。

この例によつて見るも、討伐は「大部隊で行ふ大風一過」式の方法では決して成功するものでなく、根氣強く続け匪団に対しても、匪化住民に対しても討伐部隊の決心の往を知らしめることが成功の要件であると信ずる。

(二) 時期

(1) 夏季

2920

満洲の山地は南満洲の山を除けば、その他は大抵密林で覆はれて居る。殊に夏期は樹木が繁茂して討匪行動を著しく阻害して居る、而も匪賊はこれら密林の山岳地帯に蟄居して居るので、討匪は殆んど不可能と申しても差支へない。飛行機による空中偵察さへ、全く効果なしと言ひ得る。たとゝ匪賊や匪化住民はケンを密作して居ることが多いから、その花盛りの時季にはそれを認めることができ、それに依つて匪団の巢窟や、匪化住民の所在を察知することができ、かやうな状態だから討匪行動は自製道路の両側地区に限定せられる。併し道路両側も通視が困難だから警戒を厳重にしつゝ行動しないと反て匪賊に待伏攻撃されたり、急襲されたりし易い。特に匪賊地帯を自動車で行動する場合には細心の注意が必要である。日満軍警が匪団に攻撃されて損害を出すのは常に五月から十月の間であつた。

従つて夏季は實際の討匪行動を実施するより、冬期討伐の準備として道路を修理したり新設したり、住民の農耕を援助して、住民を匪賊から分離し、官憲に好意を持たせ、または医療を施して住民の歡心を買うことなどを実点にして活動する方が効果的である。

しかし密偵の活用は夏期と冬期を問はず一年中連続して実施することが必要である。密偵使用の詳細は後即匪民分離のとき詳述することとする。

(2) 冬季

滿洲の喬木は十月中旬から落葉し始める。雪は十一月（中部滿洲吉林延吉附近の山地）から降り出し、四十糎位積る。気温は十一月、十二月の上旬に於て零下二〇度が最低であるから討匪行動は比較的容易であり、山中での露営も大して困難でない。特に夏季の間に構築した營防所内に宿營するならば一、二月の嚴寒時でも何とか凌ぎ得るが携帶天幕に依る露営は至難である。従つて嚴寒時の討伐のためには、予め

所々方々に防塞設備を施した小産を作つておく必要がある。嚴寒時に於て討伐部隊の行動が至難なと同様、追はれて居る匪賊の行動は尙一層困難である。彼らは隨所に山寨を作つて宿營の準備をして居るが、一たび討伐部隊に見されると山寨は焼かれてしまふ。冬期間、新に山寨を作ることには凍結のため殆んど不可能である。従つて彼らは嚴寒の山中を彷徨せねばならない。意志の鞏固でない匪賊は夜陰密かに匪団を脱して、山を下り討伐部隊に投降する。帰順する者、投降する者は大抵冬期間猛烈な討伐を続行したときに続出する投降匪賊の大部は匪首に探致されやむなく、匪化して居た者が大部である。主義主張によつて心から匪団に加入して居る者は極く少數の幹部だけである。その他の大部は匪団の監視が厳しいので、山を下ることができずに居る者である。従つて討伐隊に追及せられ、嚴寒の山中で衣食任に困却すると帰順投降するのである。かくて逐次匪団の結束が亂れ、幹部の威令が行はれなくなる、かうなると匪首は來春を期して再び活

動するため、一時全く姿をかくすか又は入ソしてしまふ。金日成や崔
 賢匪は多くの場合、二月頃に入ソし、五月末か六月頃に再び入ソする
 のが常であつた。

冬期間は討匪実施のため絶好の時期である。

冬期討伐の状況の一例は写真第五乃至第九の如くである。

其の二 討伐兵力と裝備

(一) 索 質

討伐兵力が多いほど効果的であることは勿論であるが所要経費の多寡
 を考へ合せると必ずしも兵数の多きを望むことは有利でない。

匪賊討伐の経緯を持たぬ指揮官は動もすると大兵力で大風一過式の討
 伐を実施し勝ちである。前にも述べた通り、かゝる方法では殆んど効
 果を期待することはできない。寧ろ精銳な小部隊で、長期に亘つて
 討伐を続行することが望ましい。即ち討伐が始まると匪賊は小部隊(三
 四十名は多い方である)に分散して逃避行動に便利をやりにするのが

普通であるし、また討伐部隊としても大隊や中隊（一五〇名）などの大部隊では山岳地帯の行動が鈍重になるばかりでなく、我が方の行動を逐一匪賊に知られる虞れが多分にある。従つて討伐部隊も五〇名以下の小部隊に分散して行動を明快にする、更に二十名位の部隊で行動することも屢くである。

彼我共にかやうな有様だから討伐部隊の素質は特に優秀なものではない。特に小隊長、分隊長の幹部は隠忍持久、積極進取の氣象に富んだ性格の持主で、強断専行よく討伐隊長の意図する所に合致する行動の採れる人物でなければならぬ。この条件は一般の野戦に於ける、中隊長や小、分隊長よりもその必要度が大きいやうに思う。然しながら討匪を主任務として居る独立守備隊の素質、就中幹部の素質は寧ろ野戦師団の將兵より劣るのが普通であつた。

その原因には多々あるが、その最大のものゝ次のやうであつた。独立守備隊の任務は鉄道の護衛、諸軍事施設の直接警備などだつたの

で、勢ひ部隊は小さく区分されて分散せざるを得なかつた。従つて守備隊長（少将）や大隊長（大、中佐）の部隊に対する教育や指導が困難であり時として小隊や分隊を奮闘に派遣したまゝ、長期間に亘り、殆んど放置されて居ることもあつた。かやうな状態に加へ、兵員は任氏に直接、接する機会が多いので守備隊の下級幹部の能力低下を来したばかりでなく、その犯罪発生も他の野戦部隊に比べ数は多く而も悪質なものが多かつた。

かゝる將兵を驅つて討匪を行はせるのだから討伐開始に當つて所望の訓練を施す必要があることは当然である。

(二) 裝備

次は討伐部隊の裝備であるが、匪賊の編成裝備や行動地域の關係を考へると海軍備で十分である。小銃、自動小銃、軽機などを裝備すれば十分である、重機関銃は有効であるが、討伐行動を輕快にするためには反て荷重介になる。ただ擲弾筒は携帶に便利であるし、彈丸の炸裂

音が強烈なため匪賊を精神的に威嚇するため、是非装備せしめる必要がある。特に匪賊が部落に上つて抵抗するときなどは極めて有効である。熱河省の匪賊が土壁を持つ小部落に拠つて抵抗したとき擲弾筒で部落内を射撃したため予期したよりも抵抗を断念して退却した例がある。

また携帯に便利な無線電信機も是非装備すべき兵器の一つである。交通の極めて不便な山岳地帯を兵力微弱な小部隊で行動する討伐隊であるから匪賊と遭遇したとき、直ちに必要な部隊と連絡しその部隊をして機を逸せず戦鬪に参加せしめたり匪賊の退路を遮断したりするためである。従来の討伐部隊には無線の装備がなかつたため戦鬪参加の時機を失して匪賊を遁走させたり、或は優勢な匪団に包囲されて若戦に陥つたりした例が数多くある。山岳地帯を行動する部隊は「銃声に向つて前進する」式の旧来の方法では、十分な各討伐部隊の協同は期待できない。

要は兵数を或程度少くしても火力を増大するため、自動火器を増大し、
かつ通信連絡の手段を完全にすることが必要である。

(三) 異民族を用ひる討伐

満洲には漢人、滿人、朝鮮人、蒙古人、白系露人等雜居して居るが治安警備の対象として考慮を要するものは漢人と朝鮮人である。

匪賊の大部分は漢人であるが、朝鮮人の存在は満洲の治安を論ずる場合軽視できない。

朝鮮人の大部は東部國境地域から朝鮮との國境地帯、就中間島省に住して居る。間島省は省人口の八割を占め、省内到る所、朝鮮人部落の觀がある。

これら朝鮮人は農耕を主として居るが商工業、金融に従ふ者もあつて經濟界の実権は全く彼らの掌中に握られて居る。間島省に於ては省の次長か民生庁長の中一人は必ず朝鮮人を以て充當して居たし、科長以下の役人も多數勤務して居た。

由来朝鮮人は明黨互に相争ふ性質を持つて居るし、かつ華大思想が強く、時の権力者の気嫌を取り結ぶことに巧である反面、反対派を排擠することを何とも思つて居ないやうである。従つて各派に属する醜情者が次ぎ／＼に來全く反対なことを續く陳述し、全く煩さい限りであつた。

また朝鮮人は不平の多い民族であり不和雷動性を有し、理屈をこね廻す民族であり他の欠点を誇大に吹聴して已れ独り良い者にならうとする性格がある。

殊に簡島省に住む朝鮮人は、嘗て李朝の政治に不平を持ち日鮮の併合に不満を抱いて滿洲に逃避して來た者かその子孫であるから、善良な者が少ないやうに見受けられる。また内心は日本に対し好感を持つて居らないのであるが、日本の勢力に壓服せられ表面は極めて温順に見える。簡島省内の少数民族である漢人に対しては、日本の勢力を立に着（彼れらを朝鮮人と呼ぶと怒り半島人と呼んでくれという）極めて

0275

0493

横暴に振舞つて居た。従つて漢人との間は融和に欠けて居る。 四四

滿洲の他の地方に散在する朝鮮人は不廷の者が多く性質陰險で怠け者のため漢人から壓迫されて居た。これは当然のことである。かやうな朝鮮人の多数住む間島省は鮮匪のため極めて安全な地域である。

だから鮮匪である金日成も、崔賢も金光も朴得範も間島省と牡丹江省の南部へこの附近も朝鮮人が非常に多いを根拠地として活動して居た。この地域以外に鮮匪は存在しなかつた。いな存在することができなかつたのである。

彼ら鮮匪は住民（朝鮮人）から関東軍や滿洲國軍、警の動きを手に取りるやうに聞いて居たし、住民は衣も食も時には住までも提供して、鮮匪を庇護した。従つて討伐部隊が回つても成果をあげることができなかつた。殊に滿洲國軍警に対しては全く匪情を教へないばかりでなく強いて匪情を要求すると時々威嚇を示して討伐行動を迷はせたり、軍警の宿営や給養を妨害したことは枚挙に遑なく、殆んどそれが常態で

あつた。これに反し朝鮮人で編成した討伐隊が乗り込むと、全く別人のやり、至れり尽せりの歓迎振りで、軍、民の完全なる協力一致、正に閩島省見るやうな有様で、彼らの歓迎は漢人部隊に対する嫌がらせとしか受け取れない。この有様は朝鮮人の国民性をよく表現して啓ると思ふ。

昔から「民衆を離れて共匪なく、共通の最も恐れる所は、民衆の離叛である」というのが正にその通りである。

然らば鮮匪を撃つた漢人部隊が過当か、それとも朝鮮人部隊の方が有効か、これは大問題である。経験によると異民族を用ひた方が徹底した討伐を実施するやうである。討伐開始の当初こそ、住民は非協力の態度を示したけれど、討伐部隊が従来と異り、長年月に亘つて討匪を続行することを知り、かつ討伐部隊が春と秋の農繁期に住民の播種や収穫を援助した關係上、流石の朝鮮人も鮮匪庇護の態度を逐次改め、討伐の中期以後に於ては、全く鮮匪から離叛し、反て積極的に漢人討

伐部隊に協力するやうになり、金日成を除く他の匪首全員を帰順させることができたのである。この帰順工作についても朝鮮人住民がこれらの匪首と討伐部隊間の連絡に任じて成功せしめたのであつて、この点から観ても住民と鮮匪との間には常に密接な連絡があつたことを知るであらう。

其の三 討伐の実施

(一) 隊長の率先垂範

すでに述べたやうに、匪賊の蟄居地域は密林、倒木で覆はれた交通至難の山岳地帯であり、討匪行の最も適当な時期は嚴寒肌をさす冬であり、衣も食も住も極めて不自由である。

この土地、この時期にこの不自由を克服しつゝ、匪賊と根氣比べをする覚悟で長年月（三省の連合討伐は約一年八ヶ月連続した）に亘らなければ討匪の目的を達成することができないのであるから、指揮官たるもの、部隊長たるものに具備せねばならない要件は凡そ想像がつくで

あらう。勿論頭腦明敏な指揮官であること身体の強健な部隊長であることが必要であるがそれにも増して要求せられる条件は責任觀念が旺盛で率先範を示す指揮官であることが望ましいのである。

年若い部隊長（独立守備隊の大隊長は大抵四十六、七才であつた）が重い防寒服をまとひ、零下四〇度の山岳地帯を杖にすがりながら、粉雪を払ひつゝ部隊の先頭に立つて討匪行をやつて居るのを見たとき若い將校以下が感奮興起するのは、当然であつて、三省連合討伐に於ても古武士の風格ある大隊長が成果を挙げたのに反し頭腦明晰で、進級も他の同輩より早い大隊長が遠く後方の都会に居つて無電や傳令により指揮をとつたため殆んど成果らしい成果をあげ得なかつた例が多い。

以上の条件は単に大隊長ばかりでなく中隊長、小隊長、分隊長に至るまで要求せられる性質のものである、討匪部隊のやうに、小部隊に分散して行動する特性のあるものに於て尙更である。

0279

0497